

2 人とつながって

- (1) 礼儀正しく真心をもって
- (2) 相手の立場に立って親切に
- (3) たがいに信頼し、学び合って
- (4) けんきょに、広い心をもって
- (5) 支え合いや助け合いに感謝して

茶道 (さどう)



伝統的な礼儀作法は、心を形で表すことの大切さを示している。

柔道 (じゅうどう)



試合前の礼、試合後の礼。礼に始まって、礼に終わる。

礼儀とは真心の表れ

「ありがとう」「もおはよう」も、そして「ごめんなさい」「も、あいさつも、お辞儀も、心を伝える形です。言葉で表さなければ相手に伝わらない。



●相手に心を伝える形には他にどのようなものがありますか。

心を伝える「形」がある

(1) 礼儀正しく真心をもって

心と心をつなぐ

あいさつ

毎日顔を合わせる人や友達とだって、一日には出会いと別れがある。朝の出会い、新しい一日の始まり。帰りの別れは、その日の一つの区切り。一日は、元気なあいさつで始め、気持ちの良いあいさつで終わりたい。

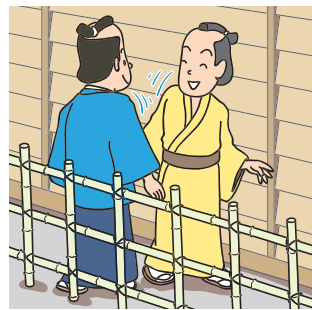


江戸しぐさで暮らそう

三百年もの長い間、平和が続いた江戸時代に色々な生活習慣が生み出され、これを「江戸しぐさ」と呼び、今に生きる知恵として役立てる動きがあります。江戸しぐさには、人々がたがいに気持ち良く暮らしていくための知恵がこめられています。

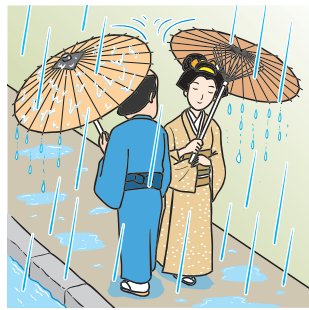
かた引き

せまい道で人とすれちがうときのしぐさです。おたがいに右のかたを後ろに引いて、相手にぶつからないようにします。



かさかしげ

かさをさした人同士が、すれちがうときのしぐさです。相手をぬらさないように、たがいのかさをかたむけます。



こぶしうかせ

複数の方が一緒にすわるときのしぐさです。一人でも多くの方がすわれるように、みんなが少しずつこしを上げて、場所を作ります。



おつとめしぐさ

人が見ているから良いことをするのではなく、だれも見えていなくても、だれかのために良いことをする心構えのことです。



他にもこんなしぐさがあります。

<p>差し延べしぐさ</p>	<p>だれかが困っていたら、それがたとえ知らない人であっても声をかけ、手を差し延べます。</p>
<p>念入れしぐさ</p>	<p>火の消し忘れや、忘れ物などがないかしっかり確認するという心づもりです。</p>
<p>用心しぐさ</p>	<p>子供は、人ごみの中では大人のそばをはなれないようにします。</p>

「江戸しぐさ」は

どうして生まれたのでしょうか

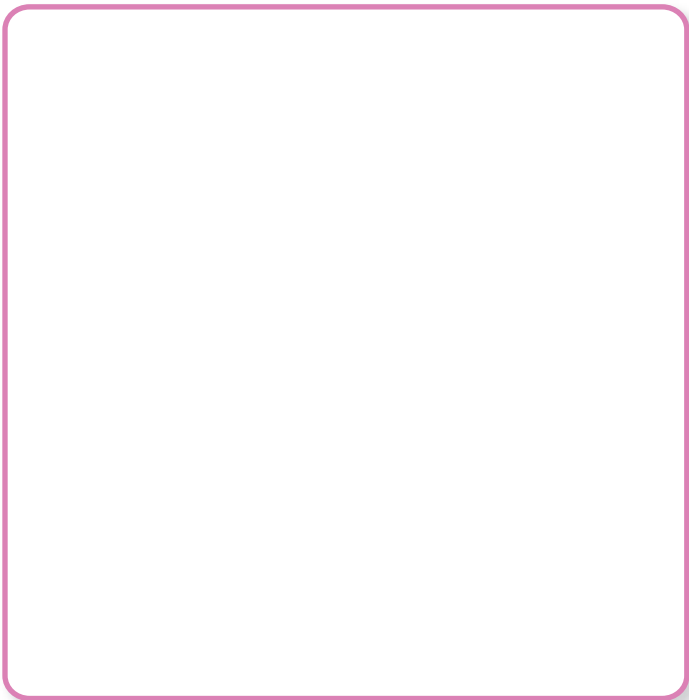
江戸時代、江戸の町には、全国から文化や習慣のちがう人たちが集まってきました。そのため、様々な人たちがおたがいに仲良く平和に暮らしていけるようにと、大きな店の商人たちは、当時、「商人しぐさ」と呼ばれていたものを広めていこうとしました。「商人しぐさ」は、例えば「お天道様に申し訳ないことほしな」とか「おかげさま」などの考えを元にした商いの心得を態度に表したものです。

この「商人しぐさ」が元になり、江戸の町に広がっていった生活習慣を「江戸しぐさ」と呼ぶようになったと言われています。

このように、江戸の人々は、お天道様にはずかしくないように行動することや、人のおかげで物事が成り立っていると考えることなどを通して、真心をもって人間関係を大切にしようとしていたことが分かります。



人間は、助け合わなければ生きていけない。
だれにでも困るときがある。あなたもだれかに助けてもらいたいと思ったことがあるだろう。
同じように相手が困っているときも、だれかに助けてもらいたいと思っているかもしれない。
だから、たがいが思いやりの心をもつことは、とても大事なことです。
相手の気持ちと自分の気持ちを重ねてみよう。



●親切にしたい……けれどもなかなか行動できないことはありませんか。どうしてなのかを考えてみましょう。

(2) 相手の立場に立って親切に

思いやりの心があるから 共に生きられる

困っている人を見ると心配になる。
何とかしたくなる。

それが「思いやり」の入り口。



だれにでもある心の温かさ。
どうすればあの人のためになるのかと
考えてみる。
それが、あなたの思いやり。
あなたらしい思いやりの心を育てよう。



相手の思いに 寄りそってみる

行為の意味

宮澤章二

——あなたの〈こころ〉はどんな形ですか
とひとに聞かれても答えようがない
自分にも他人にも〈こころ〉は見えない
けれどほんとうに見えないのであろうか

確かに〈こころ〉はだれにも見えない
けれど〈こころづかい〉は見えるのだ
それは人に対する積極的な行為だから

同じように胸の中の〈思い〉は見えない
けれど〈思いやり〉はだれにでも見える
それも人に対する積極的な行為なのだから

あたたかい心が あたたかい行為になり
やさしい思いが やさしい行為になるとき
〈心〉も〈思い〉も 初めて美しく生きる
——それは 人が人として生きることだ

相手のこころをきいて
気持ちを表す

どつすれば
相手のためになるか
考える



「思い」は見えないけれど、いろいろな形で伝えられる

表情
で

行動
で

言葉
で

態度
で



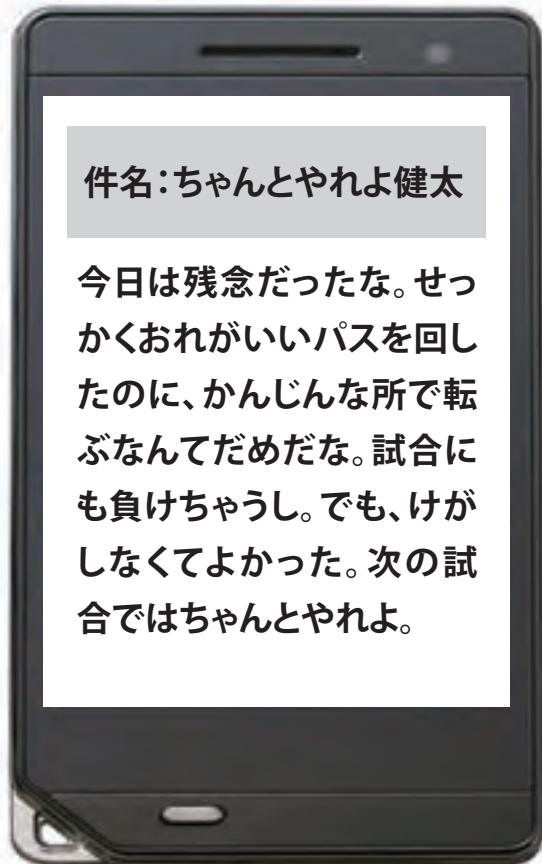
●あなたは、「思いやり」をどのように伝えたいですか。

例えばだれかが一人できびしそうにしているとき

例えばだれかが失敗して落ちこんでいるとき

相手に思いを

伝えたはずなのに……



どうしても本当の思いが伝わらなかったのか、どのようなことに気を付けなければならぬのかを話し合ってみましょう。

ぼくと健太はサッカー仲間だ。いつも「ボールいくぞ。」「おおっ。」「ためだなあ。」「っかりやれよ。」「何言ってるんだ。ちゃんと球を送れよ。」「などと言いながらサッカーを楽しんでいる。ひどい言い方だと周りから言われるけれど、心が通じ合っているから平気だと思っていた。

ところが、ある日の試合で、ぼくのパスを健太が取りそこねて転んでしまった。おかげでチームが負けてしまった。ぼくは、落ちこんでいる健太をばげまそうと、すぐにメールを送った。しかし、返事も来ないし、次の日からの健太の態度がどうもおかしい。ぼくをさけるようにしているのだ。ぼくは真司にメールを見せて相談した。すると真司は、「こんなメールが来たら、だれだって落ちこむよ。」と言った。いつもの言葉なのにどうしてだろう。ぼくは、メールを見てもう一度考え始めた。

思いやりをふり返ろう

「私からの思いやり」の記録

だれに

どのようないい

こんな気持ちで

だれに

どのようないい

こんな気持ちで

●あなたが伝えた思いやり、あなたが受け止めた思いやり。それぞれをふり返ってみましょう。

「私が受け取った思いやり」の記録

だから

どのようないい

こんな気持ちでした

だから

どのようないい

こんな気持ちでした

ロベーターの夢は、有名な劇団「アルベル」の俳優になることだった。地方から一人でこの町に出てきたロベーターには、養成所に通う余裕はなく、自分なりの練習を重ねていた。ある日の夜、養成所がどのような練習をしているのかを知ろうと、窓ごしに中をのぞいてみた。あまりの練習の厳しさと熱心さにおどろき、ロベーターは、思わず立ちすくんでしまった。

それから、たびたび夜に窓の下で熱心にメモを取るロベーターの姿が見られた。たまりかねて声をかけたのが、守衛のジョルジュじいさんだった。ジョルジュじいさんは、ロベーターの話聞き、「本当なら許されないが、他の守衛仲間にも私から話しておくよ。」

と、言ってくれた。その日から、雨の日も風の日も、窓ごしに練習の様子を熱心に見入るロベーターの姿があった。

三か月ほどたった日の朝、ロベーターは、アパートのドアの下に小さな紙の包みを見つけた。中には、養成所の月謝代に使ってください、という手紙と共に、何枚かのお札が入っていた。自分にこんなことをしてくれる人を、ロベーターは思いつかなかった。翌月も、その次の月もおくり物は届いた。

「お金をそのまま受け取ってよいものでしょうか。だれが送ってくれるのか探したんですが分からないんです。」

思いあまつて、ロベーターはジョルジュじいさんに相談してみた。

「きっとあなたに期待をかけている人なんだろうね。このお金は今借りていると思えばいいじゃないか。無駄にしないように頑張ることだね。」

そう言った後で、

「あっ、そうそう私は今度、昼間の勤めに変わることになったのでね。しばらく会えなくなるけど、くじけちゃ駄目だよ。」

と言って、やさしくほほえみかけた。

養成所に通い始めたロベーターは、一生懸命に練習に取り組んだ。日に日に実力を身に付け、先生や仲間からも次第に認められるようになってきた。ロベーターは、いつそう練習に力が入った。

ところが、しばらくして突然おくり物が届かなくなった。次の月も、その次の月も、やはりおくり物は届かなかった。はらえない月謝がたまり始めた。

「せっかくここまでできたのに……。」

ロベーターは、思わずくちびるをかむのであった。

そんなある日の夜ふけに、とびらの外にかすかに人の気配がした。そつと玄関の方をのぞくと、雪明かりの中にかがみこんで何かを置いている人影が見えた。

「ジョルジュじいさん……。」

ゆっくりと起き上がったその顔が見えたとき、ロベーターは息を飲んだまま、その場を動くことができなかった。ジョルジュじいさんは、立ち去ろうとしたが、その様子がおかしい。と思

う間もなく、雪の中にたおれこんだのである。

ロベールは外へ飛び出した。かけ寄ってみるとジョルジュじいさんは苦しそうに息をしていた。ひどい熱。ロベールは、だきかかえて自分の部屋に連れて行き、ベッドにねかせると、急いで近くの病院に向かった。玄関のわきには、見慣れた紙の包みがあった。

「難しい状態です。大分衰弱してますから。とにかく、だれか付きそいが必要です。」
医師がそう言ったとき、来ていた仲間の守衛たちが顔をくもらせた。

「体をこわして休んでいたのに、また無理して働き始めたからだろうね……。困ったなあ、このじいさんには身寄りがないんだ。」

と、だれかが言った。
付きそいとなれば、仕事を休まなければならない。ロベールは、しばらくうつむいていた。が、きっぱりと言った。

「ぼくが付きそいます。息子なんです。」

それから、付きつきりで、ねむり続けるジョルジュじいさんの看病をした。しかし、体は日に日に弱っていった。

三日目の夜、ジョルジュじいさんは、かすかにほほえみながら、ロベールに小さな声で語りかけた。

「めいわくをかけることになって悪かったね。」

「そんな……。」

「息子だと言ってくれたんだね。」

「そんなことより、ぼくのためにこんなに苦しむことに……。」

「ちっとも苦しくはなかったよ……。幸せを感じたくらいだ。」

どこまでも気づかってくれるジョルジュじいさんの言葉に、ロベールはかたをふるわせた。

「ぼく、おじいさんにあやまらなければ……。お金が届かなくなったとき、ぼくはうらみしました。本当におろかでした。どんなに苦しんでいたかも知らないで。許してください……。でも、どうして見ず知らずのぼくなんかにも。」

「私も俳優になりたかった……。君の姿を見て……。ありがとう、頑張るんだよ……。」

ジョルジュじいさんは、そう言うと、ロベールの手をとったまま、またねむりについた。それからしばらくして静かに息を引き取った。

その夜、ロベールはジョルジュじいさんからの最後の手紙を取り出し、もう一度読み始めた。

おくれていたお金を入れておきます。もうすぐ、劇団の新人募集の試験がありますね。私は心よりあなたの努力が実ることを願っています。あなたの初舞台を一日も早くみられることを心待ちにしています。

手紙の文字がなみだでかすんだ。その中に、ジョルジュじいさんの語りかけるようなやさしい笑顔がうかんできた。

ロベールは、何かを決意したかのように、遠くに視線を移すのだった。



分
か
り
合
わ
い
ま
す
と
技
を
合
わ
い
ま
す

あべりあに

あなただにあべり
あえてほんごうに
よかつた

ひとことせうしん
あから
そいつてくる
ひとがたまれば

みつを
